

宝生会 月並能

二〇一九年五月十二日（日）

開演 十四時
開場 十三時十五分
於 宝生能楽堂

ツレ和久莊太郎
シテ金井 雄資

熊野

ワキ工藤 和哉

ワキツレ則久 英志

大鼓 亀井 忠雄
小鼓 観世新九郎

笛 一噌 幸弘

後見 今井 泰行
佐野 登

地謡

高橋 憲正
小倉伸二郎
小倉健太郎
大友 順
大坪喜美雄
高橋 章
亀井 保雄
高橋 亘

15:35 入間川 大藏吉次郎

宮本 昇
善竹 十郎

シテ東川 光夫

須磨源氏

ワキ宝生 欣哉

ワキツレ坂苗 融

” 宝生 尚哉

間 大藏 教義

大鼓 亀井 実
小鼓 幸 信吾
太鼓 徳田 宗久
笛 栗林 祐輔

後見

宝生 和英
山内 崇生

地謡

澤田 宏司
小林 晋也
水上 優
野月 聡
武田 孝史
小林与志郎
中村孝太郎
辰巳満次郎

終演予定 十七時三十分頃

演目の解説

能「熊野」(ゆや)

故郷の母の病気を氣遣いながら、平宗盛の命で中々帰郷せぬ熊野のもとに、故郷池田の宿から侍女の朝顔が直接母の文を携えてやって来ます。母の思いの籠った文を読んだ熊野は、朝顔を伴い宗盛のもとに行き、文を見せて暇を望みますが許されず、今年も花見の伴に参れとそれから車に乗せられて連れ出されてしまいます。憂きを抱いたままの花見の宴で舞を舞い、折からの村雨に散る花を見た熊野は歌を詠み、それを読んだ宗盛にやつと帰郷を許されて、御意の変わらぬうちにとすぐに旅立って行きます。

狂言「入間川」(いるまがわ)

長らく在京していた大名が訴訟に勝ち帰国する途中、大きな川に出たので対岸の男に問うと、この川は入間川で渡り瀬は上流だと答えます。ところが、大名はその場を渡りはじめ、深みにはまりながらようやく岸にたどり着くと、《入間川》と言つて逆言葉を使う風習の事を語り、男を成敗すると怒りだします。すると、男も逆言葉を巧みに使つて…。

能「須磨源氏」(すまげんじ)

宮崎の神官藤原興範は、須磨の浦で老人に出会います。老人は興範の問いに答えて若木の桜のことを教え、さらに須磨に流されていた光源氏が再び都に戻り、栄華を極めて行くその生涯について詳しく語ります。あまりに詳しい物語を不審に思つた興範が尚も尋ねると、老人は我こそ光源氏であると明かし、去つて行きます。その夜桜の下に旅寝する興範の夢に、衣冠束帯の殿上人の姿で光源氏が現れ、青海波の遊樂に惹かれて舞を舞います。

次回予告

二〇一九年六月九日(日)
十四時始

采女 金森 秀祥

野守 佐野 登